

REVIEW

暮らしをめぐる立ち上がる思考の体系 — アジアの都市での実践から学ぶ包摂のかたち 曾我部昌史

苦肉の策から生まれた成果

「アジアの社会遺産と地域再生手法」に続き「アジア都市の生活圏」という二つのテーマで進められたこの共同研究では、合計11回の連続講演会が開催されることになった(本稿執筆時は最終回の開催前である)。もともと、新型コロナウイルス感染症対策のために現地視察などに赴くことが困難となったことへの、いわば苦肉の策として企画されたものである。当初は、急になじみ深いものとなったオンライン講演会形式で進められた。それぞれのテーマや講演者の選出において、必ずしも全体としてのバランスや相互の関係性を綿密に検討した上で構成されたものではなかったかもしれない。しかし、これまでに行われた10回の講演記録を読み返してみると、アジアの諸都市での実践を手がかりに、暮らしをめぐる特徴的な思考の体系がかたちづくられていることに気づかされた。苦肉の策ではあったが、現地視察だけではたどり着けなかったであろう貴重な成果が得られたといえる。

講演者もオーディエンスも、その専門領域は多様である。地域に関わる政策に関心をもつ研究者もいれば、都市再生の組織に所属する実践者もいる。私のように、異なる文脈における暮らしの実践に触れることで、建築設計における思考の広がりにつながろうと考えている設計者も少なくない。対象となった国も、中国、韓国、台湾、タイ、ベトナム、フィリピン、モンゴル、マレーシアと、東アジアから東南アジアに広がり、それぞれの国の中でも複数の地域に話題は及んだ。内容としても、今日の都市政策に関わる話もあれば、保全された生活空間そのものについての報告や、新しいかたちでの地域再生へのチャレンジも紹介された。実に多様な話題や考え方が交錯した。だからこそかもしれないが、いくつかの共通点が浮かび上がってきたように思う。ここからは、特に強く感じられた三つの共通点を振り返りながら、どのようにして暮らしをめぐる特徴的な思考の体系が立ち上がったのかを確認し、それがどのような意義を持ちうるのかを考えてみたい。

背景に向けられる強い意識

一つ目の共通点は、背景への関心の強さである。まちや建物の様子、あるいは施策の特色などが、多様で複雑に絡み合った背景とともに説明された。歴史的、文化的背景や地勢的条件はもちろん

ん、生態系の変化や素材の制約など、想像もしなかったような事柄が、まちや建物の現実をつくりあげているのである。伝統芸能や食文化といった、はじめはまちや建物にどのように関わってくるのか想像もつかないような話題が、いつの間にか必然的なものとして結びついていく。優れた推理小説で、どう関わるのか見当もつかない伏線が巧妙に回収されるプロセスを彷彿とさせる、不思議な充実感をおぼえることがあった。

重村力先生の講演における背景の扱いは、とりわけ印象的だった。客家の円形土楼がテーマである。調査を行ったときに氏が置かれていた状況の話からはじまり、やがて実際の客家調査での様子につながっていく。もちろん、そうした状況が客家の成り立ちに直接関係しているわけではない。しかし、そうした背景が連続的にかかわりながら話が進むことで、社会状況の機微の理解に大きな役割を果たし、結果として客家の建物の成り立ちや現状を、その背景を含めて理解することにつながった。

後半のディスカッションの時間において、背景への理解がより深まる場面もみられた。例えば、藤岡麻理子先生が触れた台湾での今日的な施策のありようが、重村先生からの質疑を通して、台湾特有の複雑な歴史的背景に接続し、よりリアルなものとして意識できるようになった。また、竹森紘臣氏が紹介したハノイでのパブリック空間の私有化をめぐる状況については、柏原沙織先生の質問をきっかけに、社会主義に端を発する公私の境界への意識の弱さが前提にあることが、その背景として確認された。こうした、議論が立体化していく様子には、いつもワクワクさせられた。

自分でつくること／自分たちで行うこと

二つ目の共通点は、自分でつくること、あるいは自分たちで行うことに対して、多くの講演者がポジティブに向き合っていたことである。ここで共有された多くの活動では、住民や参加者が自らの手で建物をつくったり、地域再生に向けた意識の共有を推進したりしていた。例えば、タードサック先生のカレン集落再生の一環で行われた住宅建設では、伝統的な方法を学びつつ、今日の地域的制約により良く対応しうる手法が創出されていた。自分たちで施工しているからこそ可能となる対応方法の発見である。これは、伝統的な技術の今日的更新と位置づけることもできるだろう。

伊柱善氏の講演タイトルは「ハンドメイド・アーバニズム」、自分たちで進める都市再生活動の実践についてである。専門家が計画をまとめ、住民の合意を得て、実行するという流れではない。住民たちも一緒に考えながら実行し、みんなの合意をまとめていく。活動の成果が実際に目に見えるかたちで進行しているという点も、自分たちで行うことの大きなメリットである。白石レイ先生が紹介をしたPeople's Planも、参加型のプロセスを前提としたもので

ある。時間の問題や決定のプロセスなど、いまだ課題も少なくないとしながらも、住民自身の希望に沿った移住先の選定や、空間や所有のかたちの多様化につながっていることが示された。

もともと私たちは、あらゆるものを自分でつくっていた。身近にあるものの様子を丁寧に観察し、それらを活かしながら必要なものをよりよく生み出していた。近代化にともなう生産システムの更新により、ある種の高性能化がはかられたことは事実だとは思ふ。しかし一方で、ものをつくるという行為を私たちの日常から奪ったという側面も否定できない。尹先生は「衣食住は作るものから買うものに変質した」と指摘した。自分でつくるからこそ得られる丁寧さや濃密さを取り戻そうという意識が、10人の講演者に通底していたように思う。

個性的な暮らしに宿る地域のアイデンティティ

三つ目の共通点は、個性的な暮らしの様子にあらわれる地域のアイデンティティへの強い意識である。「アジアの社会遺産と地域再生手法」や「アジア都市の生活圏」といったテーマが、そうした共通の関心を引き寄せることは当然ではある。ここで紹介されている事例はいずれも、グローバル化にともなう均質化とは対極にある。

李暎一先生は、ベトナム・サイゴンの都市の様子を、歴史的な背景を交えながら紹介した。その最後に触れられたのが、新市街トゥーティエムである。いろいろな組織によってまとめられた提案に触れながら、通底して示されていた評価軸は、ベトナム固有のアイデンティティを有するまちになり得るかどうかであった。先に触れた一つ目の共通点である「多様な背景に目を向ける」ことによって、おのずとそれぞれの地域ごとのアイデンティティが浮かび上がってくるということでもある。

単に、観光化に資するような特徴的な景観を指しているわけではないことも、強調しておく必要があるだろう。柏原先生による講演でのキーワードの一つである「リビング・ヘリテージ」という考え方に端的にあらわれているように、そこに暮らす人々や、彼らの生業のあり方などを含めた、生活そのものに根ざした固有のアイデンティティに目が向けられている。時間の経過に応じて変容を重ねつつも、それが継続的に受け継がれていくことが期待されている。そこからは、単なる愛着をこえた、宿命とでもいうべき強い関わりが伝わってくる。

これら三つの共通点が、この連続講演会全体を通底する精神（エートス）といえるだろう。講演者とオーディエンスが共有する、この精神的な風土とでもいえる共通認識を土台として、暮らしをめぐる特徴的な思考の体系が立ち上げられたように感じられた。

講演により密度が増す現地視察

新型コロナ対策が落ち着いてきてからは、連続講演会と現地視察とが連動するようになってきた。2023年8月には、共同研究メンバーの一人である西堀隆史氏とともに、ウランバートルを訪れた。半年前に行われた八尾廣先生の講演がきっかけである。現地で調査を進めている八尾先生を訪ね、数多くの興味深い生活圏を案内していただいた。講演で紹介されたとおりの様子ではあるが、それらの単なる再確認にとどまるものではなかった。どの場所も、私たちの日常を物差しに見れば、驚くべき状況である。しかし、現地で話を伺いながら体験を重ねていくと、不思議と違和感を感じない。言葉や写真では伝えきれない「あたりまえにそこにある」生活のありようが、共感的な理解を引き寄せたように感じられた。

2024年5月に行われたKhoo Suet Leng先生と柏原先生による講演は、その数か月前にベナンで行われた現地視察がきっかけである。ベナンでは、いろいろな活動団体などから話を伺い各地を巡った。最終日にはマレーシア科学大学を訪れ、短時間ながら情報交換を行ったのだが、その場で二人の関心がシンクロし、この横断的な講演会が実現することとなった。ハノイとベナンの状況や、そこでの活動についての情報を同時に共有することで、歴史地区の保全に関わる今日的課題が、より精緻に描き出されることとなった。

2026年3月には、現地でリサーチを進めている共同研究メンバーの石井先生を訪ねるかたちで、マニラの視察を行う予定である。2022年に行われた白石先生の講演で示された知見や、2026年1月に予定されている伊藤智洋氏の講演内容を頭に入れてながら現地での確認を進めることで、より密度の高い視察となることが期待される。

このように、講演会と現地視察は有機的な関係を持つようになった。講演と視察のあいだには、一定のタイムラグが生まれる。その間にも、私たちそれぞれが、何らかのきっかけでまちや建物をめぐる思考を重ねていくことになる。このこともまた、私たちのなかに形成された精神的風土が、さらに深まることにつながっているように思う。

暮らしの多様性と包摂性

少々唐突に聞こえるかも知れないが、近年の排外主義の急速な広がりを、少なからず驚きをもって見ている。そのことが特集となった雑誌『現代思想』2025年12月号を読みながら、こうした状況も、近代化が極端に進行したことと無関係ではないのはいかと思ふ。近代化にともなう均質化によって、そこからはみ出た存在の異質感が強調され、結果として排外主義的な考え方に発

展していく。直接の引き金となっているのは経済に関わる諸状況であろうが、その下地には空間的・文化的な問題が横たわっているように思われる。近代化の初期には、社会全体が外向きであったため、排外性は顕在化しにくかったのだろう。もちろん、村のしきたりなど、前近代の地域社会にも排外性は多く見られたはずである。しかし、今日の排外主義は、前近代のそれらとは性格を異にしている。SNSなどを媒介として、はるかに広範囲に拡散し、社会全体を覆うイデオロギーとして機能しつつある点に、私は強い危惧を覚える。とりわけ気がかりなのは、この排外的な考え方の背景に、文化や生活様式の違いへの違和感が存在しているように感じられる点である。つまり、この排外主義は、空間、すなわち、まちや建築の問題でもあるといえるのではないだろうか。

今回の連続講演会を通して確認された共通点が、私たちのなかにある種の精神的風土を形成したと書いた。具体的には、背景への強い関心、自分でつくる／自分たちで行うこと、個性的な地域のアイデンティティへの意識という三点である。これらは、多様な文化や生活様式の存在を理解し、受け入れる姿勢であり、既存のシステムに依存することなく、自らの好みや関心を手がかりに、多様なあり方を生み出していく態度であり、そして、それらが共存している状況を楽しむことができる、まちや建築のすがたと言い換えることができるだろう。それは、排外主義的な空間のもつ、不寛容な均質性の対極に位置する空間性である。多くの地域において、従来の共同体が十分に機能しなくなっている今日においてこそ、アジアの諸都市の様子や実践から学ぶことのできる、まちや建築の広がり、とりわけ大きな意味を持つのではないだろうか。この連続講演会の記録がまとめて公開されることで、包摂的なスタンスが可能にする暮らしの豊かさへとより多くの関心が向けられ、その広がりが生まれることの一助となることを願っている。



曾我部昌史

(神奈川大学建築学部 教授・みかんぐみ共同主宰)

東京工業大学卒業、東京工業大学大学院修士課程修了、一級建築士。伊東豊雄建築設計事務所、東京工業大学助手、東京芸術大学助教授を経て、2006年より現職。主な建築作品に『マーチエキュート神田万世橋』(みかんぐみ、2013年)、『旧谷家住宅保存改修』(曾我部・吉岡研究室、2020年)、主な著書に『アジアのまち再生』(共著、鹿島出版会、2017年)。